

新課程に向けて描く

## 「学校教育デザイン」

# 全教師がかかわるボトムアップ型で、 育成を目指す資質・能力のルーブリックを作成

東京都立第五商業高校

## アウトライン

## グラウンドデザインとルーブリックを作成



「教科会」と「教科主任会議」を  
行き来し、ルーブリックを作成

2020年3月にグラウンドデザインを策定した東京都立第五商業高校は、そこで掲げた育成を目指す8つの資質・能力それぞれのルーブリック(図)と、それに基づいた教科・科目ごとのルーブリックを作成した。

取り組みを牽引したのは、19年度に赴任した小川孝校長だ。全公立高校が19年度末までにグラウンドデザインを策定するという東京都教育委員会の施策を受け、小川校長も赴任直後から動き始めた。

グラウンドデザインの項目のうち、「目指す学校像」や「育成す

べき資質・能力」などは、学校教育目標や、前任の校長が書き留めた記録などを読み込み、小川校長が草案を作成。管理職と各分掌主任、学年主任から成る「企画調整会議」(\*1)や、各教科の主任が集まる「教科主任会議」で草案を検討し、議論を重ねながら文言を確定させた。

一方、8つに設定した育成すべき資質・能力の到達度を測るルーブリックは、全教師がかかわる形で作成を進めた。

「ルーブリックの作成は、教師一人ひとりが、学校教育目標に基づき担当教科・科目の指導のあり方について深く考える機会になると捉えました。全教師がかかわり、

ボトムアップ型で作ろうと考えました」(小川校長)

具体的には、各教科会で、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の観点ごとに生徒に身につけさせたい資質・能力を検討し、評価標準のあり方を議論した。そして、各教科会から出された案を、教科主任会議で議論し、形にしていた。教務部主任の荒井久美先生は、次のように振り返る。

「例えば、教科主任会議で、ある項目の評価規準について議論が行き詰まった際には、各教科会で再び議論してもらおうといったように、教科会と教科主任会議を何度も行き来しながら、詳細を詰めて

\*1 校長の補助機関として、校長の学校経営方針に基づき、学校全体の業務に関する企画立案、及び各分掌組織間の連絡調整、職員会議における議題の整理などを行う。

SCHOOL PROFILE

**設立** 1941(昭和16)年  
**形態** 全日制・定時制/ビジネス科(全日制)、商業科(定時制)/共学

**生徒数** 1学年約210人(全日制)

**2021年度進路実績(現役のみ)**

4年制大は、國學院大、駒澤大、成蹊大、専修大、中央大、東京経済大、日本大、武蔵大などに57人が合格。短大・専門学校進学65人。就職75人。



図 「目指すべき生徒の将来像」と、「育成すべき資質・能力」のルーブリック及び各教科における評価項目

■ 目指すべき生徒の将来像

- 資格取得にとどまらず、確かな教養を身につけ、常に変化する社会で生き抜く人材の育成
- 「望ましい勤労観・職業観、創造性」を持ち、将来起こる様々な課題に自主的に取り組み、挑戦していくことができる人材の育成

■ 育成を目指す資質・能力と、各教科における評価項目

◎：特に評価できる ○：評価可能 空欄：評価できない

育成すべき資質・能力	レベル1	レベル2	レベル3	国語	地歴公	数学	理科	保健体育	英語	家庭	商業
<b>技能・知識</b> 社会的課題に対する知識、理解力	情報を収集し、必要なものを抽出することができる。	抽出した情報を理解することができる。	抽出した情報を課題解決に活用できる。	◎	◎	◎	◎	○	◎	○	◎
<b>思考力・判断力・表現力</b> 筋道を立てて他者に伝える表現力	自分の意見を他者に伝えることができる。	自分の意見を他者に筋道を立てて伝えることができる。	自分の意見に他者が興味・関心を引くよう事例等をあげながら、工夫して伝えることができる。	◎	○	○	◎	○	◎	◎	○
<b>思考力・判断力・表現力</b> 論理的な思考力、判断力	他者のアドバイスがあれば、課題解決策を提案できる。	自分だけで課題解決策を提案できる。	自分だけで複数の課題解決策を提案できる。	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	◎
<b>思考力・判断力・表現力</b> 全般的なマネジメント力	課題の内容が理解できる。	課題の内容が理解でき、解決のためのプロセスを考案することができる。	課題解決のためのプロセスを考え、それに則って解決することができる。	○	○	◎	◎	◎		◎	◎
<b>主体的に学習に取り組む態度</b> 責任感、挑戦する姿勢、協働する力	学校の諸活動に積極的に参加できる。	学校の諸活動に自己の役割を見だし、参加することができる。	学校の諸活動に自己の役割を見だし、協働して最後まで責任を持ってやり遂げることができる。	○	○		◎	◎	○	◎	
<b>主体的に学習に取り組む態度</b> 自らを変える力、振り返る力	自己の課題を把握することができる。	自己の課題を把握し、改善のための目標を立てることができる。	自己の課題を改善し、反省と振り返りを重ねて次の行動につなげることができる。	○	○	○	◎	◎	○	◎	○
<b>主体的に学習に取り組む態度</b> 学びに向かう力、人間力	将来の生き方・在り方を考えることができる。	将来の生き方・在り方を考え、目標設定ができる。	将来の目標達成のために、今やるべきことを考え、実行できる。	○	○		◎	◎		◎	○
<b>主体的に学習に取り組む態度</b> 他者理解、異文化理解	他者の意見や異文化を受け入れ、その違いを理解できる。	他者の意見を記録・整理したり、異文化について調べたりして理解を深めようとしている。	他者の意見や異文化を正確に理解するために質問をし、比較検討することができる。	○	○		○	○	◎	◎	

地歴公：地理歴史・公民 ※学校資料を基に編集部で作成。

いきました。時間と手間はかかりましたが、すべての教師がルーブリックについての理解を深めることにつながりました」

**教科・科目ごとに、育成を目指す資質・能力とルーブリックを整理**

そのようにしてルーブリックを作成している最中に、教師から、「どの教科・科目でも『育成すべき資質・能力』を育成し、評価することは本当に可能なのか。教科・科目によって、育成・評価しやすい資質・能力があるのではないか」といった声が上がった。そこで、各教科会で、8つの育成すべき資質・能力が、その教科で「特に評価できる」「評価可能」「評価できない」のどれにあてはまるかを1つずつ検討し、その結果を「各教科における評価項目」(図)として一覧表にした。

「自分が担当する教科・科目では、どのような資質・能力を育成し、評価することが求められているのか、教育活動全体の中の教

科・科目の役割を考える機会になりました」（荒井先生）

20年3月にグランドデザインとループブリックを完成させた後は、教科・科目ごとに育成を目指す資質・能力を設定し、その到達度を測るためのループブリックの作成に着手した。

20年7月、有志の教師11人（各教科から1人以上が参加）から成る「ループブリック委員会」を設置。「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法など、ループブリックの作成・運用にあたって必要となる知識やノウハウを学んだり、評価方法に関する研究をしたりと、同年10月までに計5回の会合を実施した。各委員は、同委員会ですんだ知見を教科会でほかの教師に共有し、教科・科目ごとのループブリックの作成を進めた。

「教科・科目ごとのループブリックの形式は、全教科でそろえずに、各教科・科目に任せました。教科・科目の特性に応じた形にした方が、その後の運用がしやすく、ループブリックの活用が促進されると考えたからです。数学などは単元ご

とに作成し、国語などは全単元で利用できる共通のループブリックにしていました」（荒井先生）

### 随時見直し、ループブリックの完成度を高めていく

20年11月には、全教科において、各教科・科目のループブリックに基づいて作成した指導計画と評価計画による研究授業を実施。事後研究では、授業者と見学者が授業を振り返って、課題を出し合い議論した。ループブリック委員会の委員を務めた商業科の中島博己先生は、研究授業を行ったからこそ、見えてきた課題があったと話す。

「商業科の授業では、生徒が書いた営業日誌を、担当教師13人でループブリックに基づいて評価しました。すると、同じループブリックを用いているにもかかわらず、教師間で評価のばらつきが見られました。ループブリックの記述語の重要性を改めて実感するとともに、今後、運用をしながら少しずつでもよいから見直していこうと、教科内で話し合いました」（中島先生）

## ブレイクスルー

### 若手教師を活動の軸に据える

#### 若手教師を中心に、

#### 活気と熱意にあふれた委員会

教科・科目ごとのループブリックの作成は、新学習指導要領の実施後の活用を見据えたものだ。20年度後半からそのループブリックを用いた指導や学習評価を行い、適宜見直して完成度を高め、22年度を迎えることを構想していた。新学習指導要領の実施までにループブリックを浸透させるためには、指導や学習評価における新しい手法の導入に対して抵抗感の少ない若手教師から実践することが鍵になると、荒井先生は考えた。

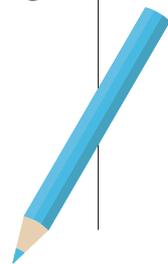
「若手教師にループブリックを活用してもらうためには、その作成に携わってもらうことが必要だと思います。そこで、ループブリック委員会の委員を、教職歴や赴任

歴に関係なく広く募りました。さらに、若手教師一人ひとりに声をかけ、これからの本校を担う先生方にこそ委員になってほしいと、思いを伝えました」

そうした結果、集まった11人の委員は、20代の教師を中心としつつ、中堅教師やベテラン教師も加わり、幅広い視点からループブリックを検討できる体制となった。

若手教師は、荒井先生の予想通り、ループブリックの研究に意欲的に取り組んだ。中には、ループブリックを自ら試作し、出身大学の恩師を訪ねて、アドバイスをもらった若手教師もいたと言う。

同委員会でも、若手教師は積極的に意見を出し、熱い議論が交わされた。委員会発足から短期間で、全教科が自教科・科目のループブリックを完成させることができた





のは、若手教師の活躍があったからだと、中島先生は振り返る。

「委員会では若手教師の仕事ぶりに間近で接し、その勉強熱心な姿に、私自身、大きな刺激を受けました。彼らが意欲や能力を発揮できる場を整える重要性を実感しました」

また、荒井先生は、グラントデザインが教師の意識に大きな影響を及ぼしていることを最近、強く感じていると語る。

「新教育課程の編成に向けた教科主任会議の議論では、『グラントデザインに掲げた育成すべき資質・能力を確実に育むためには、どの教科・科目にどれくらいの授業時数を割り当てる必要があるか』といった視点で意見が交わされました。担当教科の立場だけでなく、学校全体の視点で建設的に議論が進みました」

そのように、常にグラントデザインに基づいて意見を出し合う意識が教師間に定着すれば、ルーブリックによる評価も浸透するのではないかと、荒井先生は考えている。

## アップデート

# 教育活動や授業形態の変化も踏まえて見直す

### グラントデザインもルーブリックも試行段階

緊急事態宣言の発出による分散登校への対応などもあり、教科・科目ごとのルーブリックを用いた指導と学習評価の実践は予定通りには進められていない状況だ。

コロナ禍の中、学校全体で取り組んできたのは、オンライン授業だ。昨春の臨時休業期間中に数人の教師が始め、今では全教科で実施。緊急事態宣言によって分散登校になった際には、同時双方向型とオンデマンド型（\*2）を併用したオンライン授業を行っている。それが、各教科・科目のルーブリックの見直しにも影響するのではないかと、荒井先生は考えている。

「オンライン授業は今後も継続する予定で、そうになると、授業形態が以前と変わる可能性もあります。それに応じて、各教科・科目のルーブリックの修正も必要になってくるはずですよ。そうした点も検討するため、22年度を迎えるまでにもう一度研究授業を実施し、各教科・科目のルーブリックを見直す予定です」

グラントデザインも完成形ではないと、小川校長は話す。

「今後、探究学習にも力を入れていく予定ですが、現在のグラントデザインには、探究学習を通じて育成を目指す資質・能力について記載されていません。教育活動や授業形態などの変化に応じて、グラントデザインもルーブリックも随時見直していく考えです」



校長  
**小川 孝**  
おがわ・たかし

教職歴33年。同校に赴任して3年目。



主幹教諭、  
教務部主任  
**荒井久美**  
あらい・くみ

教職歴20年。同校に赴任して8年目。外国語科（英語）。



指導教諭、  
教務部  
**中島博己**  
なかじま・ひろし

教職歴38年。同校に赴任して11年目。商業科（簿記）。

\*2 同時双方向型は、ウェブ会議システムなどを用いて、教師や生徒がコミュニケーションを取りながら授業を進める形態のこと。オンデマンド型は、インターネット上に教師が動画や資料などをアップしておき、生徒はそれを見ながら自分で学習を進める形態のこと。